

それは、そんな物で遊べるのかと、疑いたくなる様な、使い古した、きたならしい、どっしりした、黒いさびた鉄瓶だった。

その鉄瓶と、手に持つ棒切れとが、強く触れ合わされるごとに、鉄瓶からは幅のある鈍い音が出た。

それが、無心に遊ぶ二人の幼な子の耳を喜ばしているのであった。

二人は、そのたびごとに、顔を見合せ、細い目を、更に、細くして、お互いの笑い顔を確認しながら、何度もそのすんだ音を出して聞き入っていた。

すると、かぐわしい番茶のにおいが、その鉄瓶から立ち込めてきた。

そこで、僕は目が覚めた。

僕は、どうしてそんな夢を見たのか不思議だった。

「昔、そんな事をしたことがあったのだろうか。」

僕の記憶には、はっきりとそんなことは覚えていない。しかし、知らない事が夢で出るのだろうか。

「番茶のかおりの夢かあ。」と思いつながら、目を覚ました。僕は、「においの夢」を見ていた。

時々、花園や野原の夢など、あざやかな黄色やうす青色の天然色の夢を見て、「ああ、きれいだった」と思いつながら、目をさます事がある。

今とはかなりちがう事やろう